

成果報告書

2026年 4月 15日

公益財団法人 乃村文化財団 理事長 渡辺 勝 様

貴財団の助成金事業についてご報告します。

助成区分	研究助成		
研究および教育普及活動の期間	2025年 4月 ~ 2026年 3月		
フリガナ	カナザワガクインダイガク デイジュツガクブ カトウケンイチケンキウシツ		
大学（研究室等）名 学会・博物館名	金沢学院大学 芸術学部 加藤謙一研究室		
フリガナ	アキヤマ ミナル	職名	
代表者名	秋山 稔	学長	
フリガナ	カトウ ケンイチ	職名	
担当者名	加藤謙一	准教授	
所在地	石川県金沢市末町10		
対象となる研究および教育普及活動の概要	【テーマ】	ミュージアムの収蔵展示の空間ディスプレイ上の特性に関する日韓比較研究	
	【目的】	本研究では、韓国の国立ミュージアムを中心に導入が進む収蔵展示の現状を調査し、日本の事例と比較・分析する。その第一の目的は収蔵庫機能の理解を促す情報提供などが空間ディスプレイを通じて、どのように収蔵庫が可視化されているのかを明らかにし、その実践を広く共有することである。第二の目的は、両国におけるミュージアムコレクションの保存と活用をめぐる議論とその背景、実践のあり方等に見られる共通点と相違点を明らかにすることである。	
	【実施体制】	本研究は申請者である加藤謙一が単独で実施する。韓国の収蔵展示の調査にあたっては、桂園芸術大学のキム・ヘレン氏に助言をいただき計画・実施した。	
	【実施方法】	本研究は3つの調査を通じて収蔵展示に関するデータを収集し、韓国と日本の事例を比較・分析した。まず文献調査で基礎情報を収集し、次に韓国の4つのミュージアムで収蔵展示の実地調査を行い、公開手法や空間ディスプレイの工夫、来館者との効果的なコミュニケーションを探った。さらに、日本国内の未調査施設で実地調査を実施し、データを充実させる。得られた成果を論文や発表を通じて公開し、収蔵展示の有効性と特徴を明らかにすることを目指した。	
【成果と社会的効果】	本研究の主要な成果は2点ある。①収蔵展示の様態を3つに類型化し、そのうちの「収蔵庫機能とコレクション管理を伝えるタイプ」の未整備が課題である点を明らかにできた。②日韓両国ともに収蔵展示をめぐる来館者調査が十分に行われてこなかった点に共通の課題がある一方、韓国では欧米の研究成果を取り入れた研究の蓄積が進み、国の政策にもその成果の反映が認められる点が日本の状況とは大きく異なる点を明らかにできた。これらの成果は、韓国の最新事例を紹介するとともに、収蔵展示の整備にともなう空間ディスプレイ上の指針を示す点に社会的インパクトがある。		
共同研究者等の有無	なし		
助成金額	66万円	主な使途	旅費交通費、図書費

<p>研究室名 学会・博物館名</p>	<p>金沢学院大学 芸術学部 加藤謙一研究室</p>
<p>テーマ</p>	<p>ミュージアムの収蔵展示の空間ディスプレイ上の特性に関する日韓比較研究</p>
<p>【目的】</p> <p>世界的に収蔵展示の整備が進められる一方、市民にとってはブラックボックスだった「収蔵庫」の機能や役割を伝える姿勢や取り組みは、これまで必ずしも十分ではなかった。本研究では、収蔵庫が来館者にとって馴染みの薄い存在であることを前提として次の2点の目的を掲げて研究を進めた。</p> <p>第一の目的は、韓国における4つのミュージアムに整備された収蔵展示を対象にして、収蔵庫機能の理解を促す情報提供のあり方や、保存と活用を両立させるための種々の展示上の配慮や工夫が空間ディスプレイを通じて、どのように収蔵庫が可視化されているのかを明らかにし、その実践を広く共有することである。</p> <p>また筆者がこれまで実施してきた国内事例の調査データをもとに、日韓の収蔵展示とそれをとりまく状況に関する比較・分析をおこなった。第二の目的は、これにより両国におけるミュージアムコレクションの保存と活用をめぐる議論とその背景、実践のあり方等に見られる共通点と相違点を明らかにすることである。</p>	
<p>【実施体制】</p> <p>本研究は申請者である加藤謙一が単独で実施した。韓国の収蔵展示の調査にあたっては、桂園芸術大学のキム・ヘレン氏に助言をいただき計画・実施した。</p>	
<p>【実施方法】</p> <p>①文献等調査 韓国におけるコレクションの保存と活用に関わる現状や収蔵展示の導入事例に関する文献等の収集・整理をおこなった。</p> <p>②韓国における収蔵展示の現地調査 韓国の国立館である国立公州博物館忠清圏域収蔵庫、国立現代美術館清州館、国立民俗博物館坡州館、またソウル工芸博物館を対象とした現地調査をおこなった。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div style="text-align: center;">  <p>国立公州博物館 忠清圏域収蔵庫</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>国立現代美術館清州</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>国立民俗博物館坡州</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>ソウル工芸博物館</p> </div> </div> <p>③日本における収蔵展示の現地調査 近年新たに導入された事例として、豊田市博物館（愛知県）、東京藝術大学大学美術館取手収蔵棟（茨城県）、ただみ・モノとくらしのミュージアム（福島県）の調査を実施した。</p>	

研究室名 学会・博物館名	金沢学院大学 芸術学部 加藤謙一研究室
テーマ	ミュージアムの収蔵展示の空間ディスプレイ上の特性に関する日韓比較研究

【研究・教育普及活動の成果】

韓国の多様な収蔵展示を、「収蔵庫環境を公開することで何を見せ、伝えようとしているのか」という観点から3つのタイプに整理した。その上で一般的に来観者は収蔵庫に関する予備知識は非常に少ないため、通常は、来館後早い段階でタイプ3で収蔵庫機能や資料管理活動などのバックヤード機能に関する基本的な理解を経た後に、タイプ1や2へと進むのが理想的である点を指摘した。ただし調査ではタイプ3は必ずしも十分に整備されていないことが課題としてある点が明らかになった。日本国内の多くの事例にも共通するものの、兵庫県立人と自然の博物館のコレクションリウムの導入展示や本研究でも調査を行った東京藝術大学美術館取手収蔵庫棟の「魅せる収蔵庫」におけるガイドツアープログラムの中で、収蔵庫機能に関する情報提供や解説が行われていることが確認できている。

タイプ	おもな目的	事例
1	収蔵庫環境でモノを見せる	国立公州博物館：2階 第10収蔵庫 누리 (Nurim) 国立現代美術館清州：1階 開放収蔵庫、2階 見える収蔵庫、4階 特別収蔵庫 国立民俗博物館坡州：1階 開かれた収蔵庫
2	収蔵庫環境そのものを見せる	国立公州博物館：第5・第8収蔵庫 国立現代美術館清州：3階 見える収蔵庫、4階 特別収蔵庫 ソウル工芸博物館：工芸アーカイブ室
3	収蔵庫機能とコレクション管理を伝える	国立民俗博物館坡州：収蔵庫7 見える収蔵庫 ソウル工芸博物館：第3展示棟 見える収蔵庫



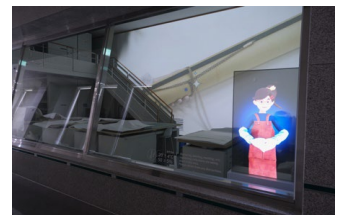
国立民俗博物館坡州
開かれた収蔵庫(タイプ1)



国立公州博物館
2階第10収蔵庫(タイプ1)



国立現代美術館清州
4階特別州倉庫(タイプ1、2)



国立民俗博物館坡州
収蔵庫7見える収蔵庫(タイプ3)

また収蔵展示をめぐる来観者研究や展示の評価と改善の取り組みに課題があることも明らかとなった。「来観者が収蔵庫について何を知っていて何を知らないのかを館側が知らない」なかで収蔵展示が導入されて、運用されている例が少なくないことを指摘した。

両国の相違点は、国立館を中心に2010年代後半以降、急速に収蔵展示の導入が進む韓国のスピード感と規模の大きさである。日本が2000年代初めから公立館を中心に徐々に収蔵展示の導入が進められてきた点とは大きく異なる。詳細な分析は今後の課題だが、韓国では政府系シンクタンクの文化観光研究院が2008年と2010年に公共収蔵庫や地域別総合収蔵庫の整備検討のための研究に着手している。国家主導で収蔵品の保管と活用の環境整備を積極的に推し進め、文化で地方振興と観光振興をめざす戦略が垣間見られる。

もう一つの相違点は、日韓で収蔵展示に関わる研究蓄積に大きな開きがある点である。収蔵展示研究をめぐる韓国の現状は、日本に比して若手研究者も巻き込みながら広い裾野で成果の蓄積が進んでいる。韓国における収蔵展示研究には、ポストミュージアムの概念を踏まえて、収蔵展示の意義が強調される点が共通する。日本における収蔵展示導入は、収蔵品の死蔵回避、収蔵庫機能への理解促進、そして公開機能を備えることで収蔵庫の新設・改修につなげたいという現実的で切実な理由によるところが大きい。韓国においても収蔵スペースの不足は共通するが、日本では「なぜ収蔵庫を可視化するのか」に関する博物館学的理論の深度と強度が認められない点も日韓の収蔵展示をめぐる状況の違いにつながっていると考えられる。

研究室名 学会・博物館名	金沢学院大学 芸術学部 加藤謙一研究室
テーマ	ミュージアムの収蔵展示の空間ディスプレイ上の特性に関する日韓比較研究
<p>【今後の成果の活用と活動の展開について】</p> <p>収蔵展示をめぐる調査研究を通じて、空間ディスプレイの観点から次のような課題の存在が明らかになった。</p> <p>① 収蔵庫という展示環境におけるモノとの向き合い方のデザイン開発の必要性</p> <p>② ①を実現する前提としての収蔵庫機能理解のための空間ディスプレイ検討の必要性</p> <p>ポストミュージアムの概念に基づく収蔵展示が導入された現場では、これまで学芸員がモノを解釈し、それに基づく情報を付して来観者に提示していた場からの転換が求められる。課題①は収蔵庫の文脈に即したかたちで、いかにモノと来観者のコミュニケーションを生み出す空間ディスプレイを実現できるかが、ポストミュージアム概念に基づきその意義を主張する収蔵展示であればこそ極めて重要であることを意味している。</p> <p>課題②は「収蔵庫の文脈」が持つ特性そのものへの理解につながる展示デザインの開発である。したがって①は②の成功の上に成り立つものであるが、現在の収蔵展示導入事例のなかでは一部で有効に機能する事例があるものの未だ開発の余地は大きい。</p> <p>今後は、本研究を通じて提示した収蔵展示をめぐる上記2つの課題を当面の中心的研究視角に据え、より広範な事例調査を進める計画である。韓国では地方館においても収蔵展示の新設が確認できている。収蔵展示の効果的な開発と運用のあり方を現場の実践と博物館学の理論を接続させながら明らかにし、ミュージアムの現場に還元することをめざす。</p> <p>また本研究は、これまで日本国内では学術的な調査報告がおこなわれてこなかった韓国の収蔵展示に関して、日本国内の事例との比較可能なデータを収集し、空間ディスプレイの観点から検討をおこなったものである。ここで得られた成果のなかには、より精緻な検討が必要なものもある。そして一部には韓国側との一層の情報交換が必要な事項もある。将来的に本研究の成果を、収蔵展示をテーマとした両国間の共同研究へとつなげるべく、引き続き調査研究に努めていく所存である。</p>	